

延原武春君と過ごした千里山時代

二十七回生 萩原 直大

昨年の千里山会誌・第十号に「延原武春君」のことを紹介させていただいたが、原稿締切日後の投稿だったこともあり、今回はもう少し肉付けさせていただきたい。なにしろ今や彼は世界的なバロック音楽の雄であり、また昨年、私は彼と半世紀ぶりに再会でき、それは千里山会のお陰でもあるので、その経緯と彼と過ごした千里山時代についても語らせていただきたい。

彼と私は比較的家が近かったこと、母親同士の仲がよかったこと、グレース幼稚園の赤組・白組及び千二小の三年までの五年間、同じクラスだったことなどで、お互い一番の親友であり、家族ぐるみの付き合いをしていた。

私は就職と同時に東京勤務となり、そのまま今に至っているが、両親はずっと平成六年に父が亡くなるまで千里山で暮らしていたので、お盆・正月は必ず家族

を連れて実家に帰っていた。そのような折には、彼の大阪での活躍ぶりをよく耳にしていた。

彼は学生中に日本テレマン協会を設立し、オーボエ奏者、指揮者、日本テレマン協会代表者として多くの賞を獲得し、海外からも招聘されていた。

昨年はグレース幼稚園の何十周年かの式典があり、演奏を頼まれたそうだが、多くの方が会場に入り切れないほどの大盛況だったそうだ。

半世紀ぶりの再会

昨年の四月十三日（金、桜の花もすっかり散り葉桜に包まれた上野公園を私と林裕三君は、東京文化会館を目指し歩いていった。林君も幼稚園・千二小と同級であった。その日は同館小ホールで、日本テレマン協会第一七五回定期演奏会があり、「ヴェニスとハンブルグの饗宴」と題されていた。

我々二人が会場に着いたのは開演の一時間も前で受付には誰もいなかったが、ちょうど通りかかった職員に事情を説明し、延原君に継いでもらった。

前もって手紙で楽屋を訪ねたいと伝えてあったので比較的簡単に取り次いでくれた。本番前の練習の真最

中で、全員まだ私服だったが、彼は客席中央で舞台の演奏者に身振り・手振りで指示していた。

林君がインターネットから彼に関する資料をコピーしてきてくれ、それに載っていた彼の写真や前ページの新聞の写真を見ていたが、このような出会でなければ絶対に彼とは判らなかつた。

練習は間もなく終わり、本番までの三十分ほど楽屋の食堂で、三人はコーヒーとカレーライスで旧交を温めた。その時の話で、彼は高校まで画家を目指していたそうである。彼なら多分、その方面でもそれなりに名をなしただろうと思う。

この再会の五ヵ月後の九月五日(水)に杉並公会堂で日本フィルハーモニー主催の定期演奏会があり、彼は指揮をとった。オール・J. S. バッハ・プログラム・ブランデンブルグ協奏曲であった。

島野和子(旧姓 森広)さんからこの催しを教えてください、当日は、島野・宮林(旧姓 村田)・三木(室井)さん達の他に奥田さんも来られ、同級生の四人で演奏終了後、楽屋に彼を訪ねた。

このような再会が可能となったのは、平成十年の千里山会(第二回)に大阪在住の西田君が出席してくれ、

いつも新調の服で、半ズボンにサスペンダーで腰にピタリと決まり、革靴に真っ白なハイソックス、蝶ネクタイに、ウエーブのかかった天然パーマ。まるで日曜日の夕方テレビでやっている「チビ丸子ちゃん」の中の「花輪君」のようであった。

一方我々と言うと、兄・姉のお古か、長く着られるようにとダブダブの服。丁度身体にピッタリの頃にはクタビレテいて、おまけにツギハギだらけ。私の場合など、姉が三人なので、靴のお古はない。だからいつも下駄を履いていた。下駄の場合、冬は足袋である。その足袋の底など、ツギハギの上にツギハギ。オリジナルの生地はどこに？

林君(右)と私(左)
幼稚園からの帰り道 確かに
私の足には下駄が・・・



まず西田君と四十数年ぶりの再会、それをきっかけに延原君の住所を教えてもらったからである。

しかしその直後、私は四年に及ぶ韓国勤務となったので、手紙を出すことができたのは韓国からだつた。その手紙に韓国での私の宿舎の電話番号を記しておいたので、しばらくして神戸に住む彼から国際電話が入つた。毎年一回、ソウルで演奏会を催していると聞いたので、

「ソウルで演奏会をする時は必ず前もって連絡してくれ」と頼んだが、韓国滞在中、二度目の電話はかかってこなかつたので、ソウルでの再会は実現しなかつた。忙しさに忘れてしまったのだろう。

彼と遊んだ千里山時代

昭和二十三年〜同二十八年頃のことである。昭和二十三年と言えば終戦から三年、まだまだモノ不足で、ほとんどの国民は、貧しいひもじい時期であつた。

でも彼の家は上の噴水の一本手前の道を右に曲がつた2〜3軒目・右側で、立派な門構えと家の玄関まで続く立派な前庭があり、和風でなかなか洒落た家であつた。裏の庭は教会の山に繋がつていた。

また彼はかなり早い時期からヴァイオリンを習つていた。最初はハーモニカであつた。当時の一般家庭での楽器と言えばハーモニカぐらいで、最初は何故ハーモニカなんて習うのか不思議だつたが、音階に慣れるためだつたのだろう。彼の家で二人で遊んでいると突然先生が来て、遊びは中断。私一人彼の部屋に残つて、彼の絵本やおもちゃで遊び、レッスンは終わるとまた二人で遊び続けた。

当時の千里山には、子どもが遊び回るのに丁度いい高さの山がいたるところにあつた。教会の山、上の噴水の少し先から一中の裏にかけての山、郊外学園には集英小学校の寮の横や奥、今の千三小の方にも山があつた。地主も大らかだつたのか忙しかつたからか、山には囲いなど無く、子どもが自由に出入りでき、駆け回ることが出来た。今ならやれ危険だ、怪我をする、訴訟騒ぎだ等の煩わしさからフェンスで囲われてしまふだろうが。

いや、そんな山自体がなくなつてしまひ全て宅地に成つてしまつているが。その山をいっぱしの探検家になつたつもりで秘密基

地を作ったり、駆け回って一日中遊び続けた。

ところが彼は人一倍漆に弱かった。普通、漆の木を折って汁が腕などに付いた場合、夜に発疹が出て悩まされることはあるが、翌日学校を休むほどではなかった。しかし、彼の場合は漆の木の傍を通っただけで体中に発疹が出て、1、2日学校を休んだ。今の彼の面の皮を思うと・・・いや、失礼

宮武先生

我々がグレース幼稚園を卒園し、千二小に入学した頃から同幼稚園で宮武先生による絵画教室が始まった。多分、我々より上の学年や教年下の学年以降の方はご存じないかも知れないが。

宮武先生ご自身、千二小は元より幼稚園とも直接的には関係なかったと思う。後日知ったことだが、先生は「絵を通して児童心理学者」とのことであった。

先生はいつも子どもたちに自由に題材を選ばせ、自由に絵を描かせ、出来上がると必ずどこかいいところを見付け、誉めてくださった。

しかし、マンガ・絵本、特に塗り絵がお嫌いでした。「見た通りに画きなさい」とよく言われた。

マンガや絵本から影響を受け、それらを真似て描くことを嫌われたのだと思う。

一般的に男の子は車や飛行機、船の絵を描くのが好きである。しかし、当時の千里山では飛行機・船は元より車ですら減多にお目にかからない。進駐軍のジープか牛（たまに馬と人間）が引く荷車ぐらいである。

私はよく船の絵を描いた。絵本からのイメージで描いたのだろう。そのことは叱られなかったが、船とくればカモメである。（その発想もきつとお叱りの対象？、そのカモメの姿を今もよくマンガ等で描かれている英語のMのように描こうものなら間違いなく大目玉だった。一度、船の上方にヒヨコのようにカモメを描いたら褒められたことがあった？

さらに、風景画で道の幅を先方で細く描こうものならこれまた大目玉である。

「そのようには見えない！見た通り描きなさい！」と確かに目に映る道路幅は、遠近法のように見え、手前も前方も道幅は変わらない。

後日、母から聞いた話だが延原君の絵を見て先生は、「この子の絵には「狂」がある」と「狂」とは？

きつと彼の絵にただならぬ才能を感じ取られたのだと思う。ちなみに私は母に、

「僕の絵は何で言われた？」と聞いてみると「この子の絵には「夢」がある」だった。

その答えに、「上手い！さすが！」と唸った。必ずどこかいいところを探し出し褒めて下さった先生のこと。私の絵では、そうとしか言いようがなかったのだ。その後の結果が見事に証明している。

小学校の一年が終わる頃、延原君・私と夫々の母親の四人で牧落のご自宅に寄せてもらったことがある。駅から大人の足なら十分ぐらいか？子どもの足ではかなり遠く感じた。当時はどこもそうだったろうが、駅周辺の繁華街を過ぎると両側は田畑が広がっていた。そのうち、少し小高くなった所に先生のご自宅があり、我々子どもでもここが先生の家であることが直ぐに解る。玄関の脇にはトーンボールが立ち、カヌーが横たわっていたのだから。

リビングルームに通された我々には更なる驚きが待ち構えていた。広い部屋の壁一面に、アフリカから持ち帰られた土人

の盾や太鼓、飾り物が並んでいた。更に地下室にはおびただしい数の槍、刀といった武器が所狭しと並んでいた。

先生は京都の資産家の息子で、戦前にアフリカ探検、アラスカ探検に行かれ、その時に入手されたものだろう。探検記も出されていた。風邪で学校を休んだ時など母によく読んでもらったものである。

その頃は元米国水泳界のゴールドメダリスト・ワイズミラーのターザン映画全盛期だった。グレース幼稚園で上映されたこともある。その後、私が十五少年漂流記、スタンレーのアフリカ縦断記、スエン・ヘディングの楼蘭やさ迷える湖・ロブ・ノールに夢中になったのはターザン映画、山川惣治の「少年王者」、「少年ケニア」の他に、先生のご自宅の影響が大きかったのかもしれない。あながち、先生の「この子は夢見る子」は当たっていたのか？

私のような凡人より、武原君の才能を見抜かれていたことの方が凄いが。

いつの日か、延原君が千里山会でオーボエを演奏してくれ、皆を泣かしてくることを夢見ている。

六十歳の誕生日だった今日(三日)、シューマン「女の愛と生涯」など珍曲をオーボエで演奏する珍しいリサイタルを大阪で開いた。楽屋で「おばさん、わしのオーボエで泣かせたわ」と言い決して舞台上がり、終演後は「いや、まだまだやれるわよ」。楽語で語りかけるように演奏するスタイルに手応えを感じた様子だ。

指揮者・オーボエ奏者 延原 武春



のぶはら・たけはる 1943年大阪府生まれ。大阪音大在学中の63年、バロック時代の作曲家の名を冠したテレマン・アンサンブル(現日本テレマン協会)を設立した。同協会代表。

「あなた」を泣かせたい
子供の頃から歌が大好きで、母に「日本では就職は不利、手に職をつけた」と言われ、音楽家を志した。高校で手にしたのが、人間の声に近い楽器のオーボエ。大学卒業時にオーケストラへの就職を希望したが、「あなが強い性格のため入団はかなわず、独りや少数での演奏で腕を磨いた。結局、オーボエの名曲の宝庫であるバロック音楽の世界に深く入り、演奏者と客さんとの対話は間接的。自ら楽語を演奏すれば体温まで伝えることができる。そのときに、おばさん、わしのオーボエで泣かせたわ」と語り、たまたままだやれるわよ。楽語で語りかけるように演奏するスタイルに手応えを感じた様子だ。

平成 15 年 3 月の日本経済新聞朝刊・文化欄の記事より

私が新聞で彼の名に気付いたのは、これが2度目最初のもは、某作家のエッセイの中で、別に彼を取り上げたものではなく、ヴィオラ演奏者の前橋汀子さんに関するもの彼女が何か演奏上で行き詰まると、彼の所に相談に行くとのことであった。あんな美人がそれも先方から！私も土木技師なぞにならず、音楽家になればよかったと反省？

下記の本は先日、奥田さん(24)に貸していただいたものである。

二〇〇〇年十一月初版なので、今も購入可能かどうかは解らない。

読んだ方もおられるかと思うが、幼馴染といえどフィクションとノンフィクションの部分の区別はつかない。私にはどちらでもいいことでもある。本文にも書いたが、千里山会の陰で半世紀振りの再会が可能になったが多忙な彼のこと、交流は難しい。但し、幸いなことに、曽根崎新地にあるテレマン協会事務局と懇意になれたので、そちらを通じて彼と接触していきたいと思っている。

特に東京での同協会演奏会は奥田さんを通じ千里山会ホームページで知らせさせていただいている。

十一月二十三日・東京文化会館でのチェンバロ協奏曲は彼が指揮。六十五歳以上の方は二千円。是非参加を

中野順哉

Nakano Junya

小説 延原武春

ある指揮者へのオマージュ



東方出版